

「後藤芝山先生に教えてもらい、ここまで来ました。高松藩の新田村では日照りが続き、水無く、百姓が困っております。どうか、お力を貸していただけませんか」

持てる言葉で精一杯懇願したつもりだ。

権左は落ちくぼんだ大きな目を更に大きく見開き、上目づかいに彦輔を睨んで冷たく言い放った。

「わしは、もう年じや、ため池なんぞ造らん。仮

にわしが若こうても、お前なんぞにできる仕事じやないわ、分かったら直ぐに帰れ！」

「権左さま、民が困って！」というと同時に、小さな引き戸が大きな音をたてて閉ってしまった。

でもここで待つことにしよう。彦輔は、自分も本気なのだとは度々も言い聞かせた。

権左が屋外の便所に足を運ぶたびに、目が合い「帰れ！」と叫ばれた。

日が暮れ、それでも彦輔は石の上から動かなかった。夜も更けるとさすがに、権左の家からも灯が消え、あたりは闇に包まれる。もうこの石の上で一夜を過ごす心と心に誓ったとき、小さな扉が音もたてずに開いた。

「お前、腹が減ったろ、これ食べろ」

最初に出会った少女が、握り飯二つを差し出したのである。

彦輔は立ち上がって、それを受け取ると深々と

何度も扉に向って叫んだが、全く返答は無い。途方にくれたまま、傍らの石に腰かけ、下を向いて考えた。

民のためにと認めてくれた父や問答までして教えてくれた芝山先生、何ととっても心から困っている新田村の民。ここで、ああ、そうですかと簡単に引き下がる訳にはいかない。

芝山先生の言葉を思い返す。それは、考えがまとまらず思案する彦輔にいった、本気で解決したのならば、という言葉だった。本気になったからこそ、ここまでやって来たのだ。

高屋の権左はため池を造る職人なのだろう。ならば答えは簡単、権左に知恵を借りるまで何日

頭を下げ、頭を上げた時には扉が閉っていた。

そのような事が二日間続いて、三日目の夜、少女が差し出した握り飯を受け取ると前日と同じように頭を深々と下げた。ただ前日と違っていたのは頭を上げた時、そこに高屋の権左が立っていたことだった。

権左は「中に入れ」と彦輔を家の中へ引き入れた。二人に導かれるように中に入る。狭い土間は奥の裏口まで続いているが、途中のあたりが腰かけた権左は、草履を脱ぎながら顔を歪める。「たえ、桶に水を持ってこい。おまん、彦輔というたな、その水で足と体を拭かんかえ、臭うてまらんわ」

そう言い残すと、さっさと奥の部屋に行つてしまつた。

少女の名前は、たえというのか、桶に水を持ってきて手ぬぐいを渡してくれた。

「いろいろお気づかいありがとうございます」
素直な気持ちだつた。寝静まつた後に差し入れてくれた握り飯は、どれだけ勇気づけてくれたかわからない。

しかし、ろうそく一本だけの明かりは、たえの無表情を映し出す。

「父が中へ引き入れたとなれば、お前の心根を認めたのだろう。今日はここで寝ると良い。話は明日だ。父の機嫌を損ねぬよう話すことだな」

親がへんくつならば、子も同類なのか。

何日ぶりに彦輔は、畳の上で眠ることができた。

朝になり、気がつくとき家の中には誰もいなかった。何度も呼びかけたが、返事がない。外に出ると、たえが背中に竹かごを背負つて帰つてきた。「彦輔、起きたか、もうすぐ権左が帰ってくるから、それから朝飯だ」

そういうと、家の中に入って、かまどに火をおこし始めた。

二人とも、こんなに早くからどこへ行つていたのかと尋ねる。

「お前の村では、薪は誰かが持つてきてくれるのか」

たえはそういうと、かまどの火を大きくするために火吹き竹をくわえた。

「それでは、権左さまも薪を?」

「父は、山へ行った」

無機質な会話は続かない。彦輔の呼びかけには全く興味が無いようだ。手持無沙汰に耐えきれず外に出ることにした。

あらためて丘の上から見下す山村の風景は雄大だ。遠くの山々は深緑と薄緑の濃淡が滑らかに変化して、土砂崩れの後だろうか山肌をあらわにした赤土の色が景色を引き締めている。そ

の美しい光景を前に、しばしの安らぎすら感じる。

暫くすると権左が帰つてきた。それも肩に猪を背負い、手は血まみれで、顔は泥にまみれている。

「たえ、後でこのししをさばくで、手伝え」

ぶつきらぼうに猪を放り投げると、また出て行つてしまつた。

彦輔は我に返り、急いで権左の後を追う。

背丈ほどある雑草をかき分け、大木の横から覗くと、小さな小川で裸になり頭から水をあびている権左を見つけた。

権左は彦輔に気づいたのか、川から上がると手

ぬぐいで顔を拭き手招きをした。明らかに彦輔を呼んでいるようだ。へんくつな男の機嫌を損ねぬよう、静かに歩み寄った。

「彦輔、おまん、わしに頼みがあるというちよつたが、前にもいうたとおり、わしはもう年じや、ため池を造るのを止めてしもうた。じゃから、わしに頼んでも無理なものは無理じや」

権左のことは何故か素直に聞こえた。山で暮らす純粋な老人がひと仕事終えて燃え尽きた感想のように聞こえる。

そういわれても彦輔には重要な仕事がある。新田村の水不足を解決するために、その手掛かりだけでも教えてもらわなくてはならない。そのた

めにここまで来た。

真剣に新田村の実情と悲劇を訴える。

——日照りが続けば、村が死ぬ——

あの長老がいった言葉を代弁した。

——水は誰のものなのか——

その答えも探しているともいった。

薄笑いを浮かべた権左は、手ぬぐいで首のまわりを拭う。

「おまんに、一日、四百人の男衆と山一つ分の土を用意できるんか？」

ため池を造るためには大きな土木工事が必要なことくらいわかっていたが、彦輔には何一つ用意できるものなど無い。そこまではつきりいわ

れると希望も微塵に砕け散る。

「意気消沈する彦輔に権左は追い打ちをかけるように話す。

「ため池を持った村はな、水に富めることと相応の苦悩を抱えることになるんじや」

視線をあげると、そこには揺るぎない自信に満ちた権左の顔があった。

「体を拭き終り、ふんどし一つのみままで彦輔の真正面に立つ。

「その村は水の恐ろしさがわかったらん。ため池があるちゆうことは、大雨の度に堰堤が切れる恐怖と闘うことになる。堰堤が切れば、その村は田も畑も家も井戸も全てが無に帰るんじや。

水が無うてもその村は、その恐怖がないんじやから幸せじや。それを新田村の衆に教えてやれ」

一陣の風が川沿いを吹き抜けた。深緑の木々は、うねるように風と同調し、巨大な動物のよう動いた。

彦輔が沈黙する中、背後から、甲高い声が聞こえた。

「私が、その村に行つてやる」

振り向くと、そこに、たえが立っていた。権左の顔が、みるみる鬼の表情に変わる。

「お前には関係ない。すつこんじよれ」

たえは、歯を食いしばり、権左を睨んでいる。それは、今にもつかみかからんばかりの鋭い

視線だつた。

権左は、たえの事など眼中にないといわんばかりに、脱ぎ捨ててあつた着物を抱えると一人でさつさと帰って行く。

一方、たえは硬い表情のまま仕方なく権左の後を追つた。

取り残された彦輔は、権左のいつたことを頭の中で何度も繰り返し、自問自答する。しかし、答えは出ない。そればかりか、なおさら迷路に迷い込むばかりで無情にも時ばかりが流れていく。

権左の答えは、水が無いことが幸せだということだ。それを新田村に伝えなければならぬのか。それが、水は誰のものかという答えなのか。

気がつくときと黄昏があたりを包みこんでいた。

小川の水は溜まることなく流れている。この水も誰のものなのか、考える力は無かつた。

大きな岩に座つたまま無意識に景色を眺める。目の前を一匹のトンボが飛び交つて、ある時には上に、右に、そして川の水面に近づくと、一瞬水に触れ、早い速度で森の方向へ飛び去つた。その様子を目で追うと、その視線の先に高屋の権左が立つていた。

岩から飛び降り駆け寄ると、権左は彦輔の顔をまじまじと見つめる。

「おまん、逃げ帰つたと思うちよつたが、こんな所で、なにしとんじや？」

権左は何かの仕事を終えてきたのか、顔も体も泥々だ。

「おまんの親は役人か」

「いいえ、百姓です」

「なら、なんで、よその村の水不足をここまでして解決したいんじや？ 普通なら見て見ぬふりするもんじや」

権左のいうとおり、心から湧きあがる気持ちは説明できない。自分でも不思議なのだ。

「おまんのような奴が、ひと夏の間に二人か三人訪ねてくるんじやが、そいつらは、おまんと全く同じことをいう。ため池、造ってくれ、ちゆうてな、けんど、水は誰のものか教えてくれとい

うたんは、おまんが始めてじや」

後藤芝山先生の問答が脳裏によみがえつてくる。他人には水が誰のものかなどどうでも良いのかもしれない。しかし、彦輔には重要な問題だつた。

(以上4月15日放送分)